2020.8.4

上信越版

一貫作業システム推進

地ごしらえにメリット

吉本

吉本（長野県南佐久郡、由井正隆社長）は、カラ松の循環林業を推進しており、「伐ったら植える」を基本にしている。4年前から林野庁が推進する一貫作業システムを導入し、機械による地ごしらえを行っている。再造林後の育ちが良いほか、下刈り作業が少ないなどメリットが多いという。

主伐・再造林に伴い、下刈りなどの作業が必然的に増える。林業従事者が増えないなか、施業計画が進むにつれ、手が回らなくなる恐れもある。同社もその懸念を持ちながら主伐・再造林を進めてきたが、「思っていたほど下刈り等の作業が増えていない。地ごしらえで表土をはぐ機械化のメリットが大きい」（由井正宏専務）という。

安全で作業効率が高いグラップルによる地ごしらえ

由井専務は当初、機械による地ごしらえに半信半疑で取り組んでいた。林内に棚を作って枝葉を片付けるなど、人力による作業が当たり前だった。機械が入ることによって表土がはがれてしまい、山にとっても良くないと思っていた。

同社はグラップルで地ごしらえを行っている。1年目には林地に直接入り、横転する事故も起きたが、幸い機械の損傷だけで済んだ。その後は工夫を重ね、横方向に何度も行き来を繰り返して地ごしらえ用の道を造りながら林地に入るようになり、安全に作業できるようになった。

4年後の現在、機械化のメリットは大きいと感じている。まず、枝葉はすべて林道脇に片付けるため、下刈り作業が安全で楽にできる。手作業で行っていた頃は、林内に枝葉の棚ができるが、草で隠れどこにあるか分からなくなっていた。下刈りの時、歩きにくく、刃先が棚に当たる危険もあった。

次に、表土がはがれることによって、苗木の活着が良くなるほか、思った以上に育ちが良いという。2、3年目の下刈りだけで4年目はやらなくてもよい施業地もあり、人工が少なくて済む。同社が管理する八ケ岳周辺は笹地が多く、従来から再造林は難しいと思われていた。ところが表土がはがれることによって笹が絶え、再造林できることが分かった。

「現在は技術も向上しており、機械が入れるところと入れないところを完全に色分けし、人力による作業はほぼゼロに近い。当社としての完成形に近付いている」（同）と話している。